

主 題：主にのみ栄光あれ

聖書箇所：詩篇 96篇1-13節

多くの人は年初を迎えて様々な計画・目標を立てるでしょう。こんな一年にしたい、このようにこの一年を過ごしていきたい…と。そういうクリスチャンもたくさんいるでしょう。そこで、皆さんといっしょに考えてみたいことは、私たちにとって生きることとはいったい何なのか？ということです。私たちクリスチャンにとって、生きるとは何なのか？このように言えませんか？「私たちの主なる神への応答である」と。私たちの偉大な主なる神に対してどのように応じて生きるのか？ということです。私たちの創造主なる神に対して、私たちを生かしてくださっている神に対して、どのように応答していくのか？どのように生きていくのか？私たちを罪から救い出してくださった神にどのように応えていくのか？私たちは神の前に「神さま、もっと愛をください」とは祈りません。なぜなら、神の愛はもう十分に与えられているからです。問題は、私たちがいただいた愛に対してどのように応えていくか？です。私たちは「神さま、祝してください」と祈ります。しかし、神は私たちに十分な祝福を約束してくださっています。問題は、神の祝福が十分であるかどうかではなくて、私たちがその祝福を受けるにふさわしい者として歩んでいるかどうかです。

つまり、こういうことです。神の祝福は与えられるのです。しかし、私たちがそれを受けるにふさわしい者として歩んでいるかどうか、そこに問題があるということです。ですから、私たちが考えなければいけないことは、神がもう私たちのためにしてくださったすばらしい恵みのみわざに対して、その神の愛に対してどのように応えていくのか？ということです。それが私たちにとって「生きる」ということだと思いませんか？この偉大な神に私はどのように応えていくのか？このすばらしい主に対して私はどのように生きていこうとするのか？

実は、私たちが今日見ようとしている詩篇96篇のみことばは、私たちにそのことを教えてくれます。この箇所は「三つの正しい神への応答」を教えてくれます。私たちはどのように神に対して応答すべきなのか？ごいっしょにそれを見ていきましょう。

★神への正しい応答

A. 主なる神を誉め称える 96:1-6

私たちクリスチャンは神に対してどのように応えていこうとするのか？どのように生きていこうとするのか？みことばが私たちに教えることは「この神を常に誉め称えなさい」です。

1. 賞賛への招き 1-3節

96:1-2 a 「:1 新しい歌を【主】に歌え。全地よ。【主】に歌え。:2 【主】に歌え。」御名をほめたたえよ。」「歌え、歌え、歌え」、そして、「ほめたたえよ」と、これらはすべて命令形です。このように為しなさいとみことばは私たちに命じるのです。恐らく、皆さんもご存じでしょう。神を誉め称えるということは、神の前に正しいことであり、神がお喜びになることです。私たちが神を賛美したり、「神さま、感謝します。」と心から言うことに、神はそれをお喜びになるのです。

詩篇92:1-2には「:1 【主】に感謝するのは、良いことです。いと高き方よ。あなたの御名にほめ歌を歌うことは。:2 朝に、あなたの恵みを、夜ごとに、あなたの真実を言い表すことは。」とあります。ですから、私たちが常に神に感謝を表わしていくこと、神を誉め称えていくことを神はお喜びになるのです。少なくとも、私たち信仰者はそのように生きていくべきです。

また同時に、神は私たちの賞賛に値するお方です。詳しい理由は後で見えていきます。96:1には「新しい歌を【主】に歌え。」とあります。古い歌ではなく新しい歌を歌い続けていくのです。なぜなら、主の恵みは常に新しいからです。私たちは日々神からすばらしい祝福を与えられ続けています。こうして、私たちが今日という日を迎えることができたことも神の恵み、神のあわれみのゆえです。ですから、私たちは主から与えられた一つ一つの恵みを覚えて、この方にふさわしい感謝と賛美をささげ続けていくのです。この1-2節で、まず、主によって贖われた私たちが神を誉め称えることを神は喜んでくださるということを見ました。

そこで私たちが考えなければいけないことは、私たちはそのことを実践しているかどうかです。どちらかというと、私たちの神への感謝や神を誉め称えることには何かの条件が付いていませんか？物事が思い通りにいっているときには神への感謝、神を誉め称えることは簡単なことです。問題は、私たちがいつもそのように継続できるかどうかです。確かに、みことばは私たちに「新しい歌を歌い続けていきなさい」と教えます。主はそれにふさわしいお方だからと。でも、それができない私たちがいます。ど

すればいいのか？皆さんにアドバイスを送ります。

哀歌3章をご覧ください。簡単に背景を言います。どのような状況でこの手紙が書かれているのか？これを書いたのは預言者エレミヤです。エレミヤが過ごした時代は、南王国ユダが神の前に罪を重ねていました。そして、ついに、エルサレムが崩壊するときがやって来ます。哀歌の2章を見ると、バビロンが攻めて来てエルサレムの城壁を囲みました。大変な苦しみ、大変な問題の中で、特に、彼らには食料がなかったのですが、悲惨な出来事が記されています。母親が自分の子どもを食べた様子が書かれています。城壁は跡形もなく崩され、神殿も崩されて、エルサレムは滅んでしまいます。エレミヤの心は引き裂かれました。自分の愛するエルサレムの都が滅ぼされてしまったからです。その悲しみの中で彼はこの手紙を記すのです。本来なら、「神さま、なぜ、こんなことが起こるのですか？」と不満を言ってもおかしくなかった。でも、エレミヤは神の前にこのように自分の気持ちを表わしています。哀歌3：22-23 a「**私たちが滅びうせなかったのは、【主】の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。：23 それは朝ごとに新しい。…**」、21節では「**私はこれを思い返す。それゆえ、私は待ち望む。**」と語っています。つまり、エレミヤは大変な悲しみの中にあつてあることを思い起こしたのです。

彼は「主の恵み」を思い起こしたのです。神がどのようなお方であるかを思い起こすのです。そして、彼が目留めたのは、このような状況にあつても神は私たちに恵みを与え続けてくださっているということです。なぜ、エルサレムが滅んでしまったのか？それは神の警告通りでした。神がお教えになった通りに物事が起こったのです。実は、これは南王国ユダの話です。イスラエルは二つの国に分かれてしまいました。いったい、この国に何が起こったのか？サムエルという一人の預言者が年老いた時、イスラエルの人々は彼のところにやって来てこう言うのです。「**私たちが治めてくれる王を立てて欲しい**」と。それがどれほど大きな罪だったのか分かりますか？それまで、この国は神が治めていました。人々はこう言うのです。「**神では不十分だ。私たちは他の国と同じように人によって治められたい**」と。大変な罪です。その結果、神は人々の願い通りに王を与えるのです。そして、サムエルのところにイスラエルの民が再びやって来ます。サムエルはこのように伝えます。「**あなたがたは一つだけ覚えておかなければいけない。「ただ、【主】を恐れ、心を尽くし、誠意をもって主に仕えなさい。主がどれほど偉大なことをあなたがたになさったかを見分けなさい。：25 あなたがたが悪を重ねるなら、あなたがたも、あなたがたの王も滅ぼし尽くされる。」**（Iサムエル12：24, 25）」と。そのように神はサムエルを通して警告されたのです。つまり、神の前に正しく歩むならそこに祝福があるけれど、神に逆らうならそこにはさばきがあると。エレミヤはそのことを現実に見たのです。このユダが滅びたのです。エルサレムが滅んだのです。人々の罪のゆえです。

ですから、このような悲しみの中にあつてもエレミヤは、神は約束を守られるお方、神が言われたなら必ずその通りになるという確信を強めるのです。そして、悲しみのどん底にあつても、でも、神は約束を守られる方だ、このイスラエルの民が罪を犯したゆえに私たちはさばきを経験しているけれど、神はこの契約の民に対する約束を忘れておられないと言うのです。つまり、エレミヤがこの大変な辛さの中でこのように神に賛美をささげることができたのは、神を誉め称えることができたのは、彼がしっかりと主を見上げたからです。私の神がどんな神なのか、彼はその神をしっかりと覚え、その約束の上に立つのです。

ということは、私たちも同じです、皆さん。いろんなことが起こります。辛いことが起こります。悲しいことがあります。でも、あなたの目がその起こっている出来事に向くなら、あなたの心は動揺します。そして、あなたの口から神への賛美が消えていきます。しかし、あなたがその背後にいる全能なる神を見る時に、エレミヤがそうであったように、現状は変わらなくても、私たちはこの神に対して賛美をささげることができるのです。そうして信仰の勇者たちは生きて来たのです。ですから、私たちはどんな時であっても、自分の心をしっかりと吟味して、自分のうちに罪が潜んでいないかどうか、それがあつたらばそれを主の前に告白して、そして、主の恵みを覚えて歩み続けることです。

2. 神をほめたたえるその理由 4-6節

「新しい歌を主に歌いなさい。主をほめたたえなさい。」と著者は命じます。その理由が4-6節に記されています。四つの理由があります。

1) 大いなる方 4 a節

「**まことに主は大いなる方、**」と、神の重要さを表わしています。この方以上に重要な方はいない、この方に優る存在はないと言います。なぜなら、この方は神だからです。

2) 大いに賛美されるべき方 4 b節

「**大いに賛美されるべき方**」と、この方はすべての被造物によって誉め称えられるべきお方です。

3) すべての神々にまさって恐れられる方 4 c節

「すべての神々にまさって恐れられる方だ。」、なぜ、恐れられるのか？それはこの方が真の神だからです。詩篇 89 : 7 をご覧ください。「主は、聖徒たちのつどいで大いに恐れられている神。主の回りのすべての者にまさって恐れられている方です。」とあります。96章の6節を見てください。「尊厳と威光は御前にあり、力と栄光は主の聖所にある。」と、つまり、この神は尊いお方であり、栄光に満ちあふれた聖いお方である、この主の前に恐れを抱かずに立つことのできる存在はどこにもないということです。主に仕えたイザヤが主の臨在の前に立った時、彼は大変な恐れを抱きました（イザヤ書 6 : 1-5）。同じように、私たちも今私たちが立っている神、そして、私のすべてを見ている神がどんな神であるかを覚える時に、間違いなく私たちの心は震えます。どんな神が私たちを見ているのか？この方は全く聖い方であり、ゆえに、私たち罪に汚れている一人ひとりがこの神の前に生きたまま立ちおおせることなどあり得ないのです。私たちが神の前に立つなら、その瞬間に滅ぼされてしまいます。それ程この方は聖い方なのです。

モーセが神とのやり取りの中でこのようなことを教えられます。出エジプト記 33章 20-23節「また仰せられた。「あなたはわたしの顔を見ることはできない。人はわたしを見て、なお生きていることはできないからである。」:21 また【主】は仰せられた。「見よ。わたしのかたわらに一つの場所がある。あなたは岩の上に立て。:22 わたしの栄光が通り過ぎるときには、わたしはあなたを岩の裂け目に入れ、わたしが通り過ぎるまで、この手でああなたをおおっておこう。」と、なぜ、こんなことをしたのか分かりますか？主の栄光を見たときに、私たちはその前に生きることはできないからです。主の御顔を私たちは拝することができません。なぜなら、この方は全く聖い罪のない方であり、私たちは汚れているからです。その後 23節「わたしが手をのけたら、あなたはわたしのうしろを見るであろうが、わたしの顔は決して見られない。」。同じ出エジプト 40 : 35にも「モーセは会見の天幕に入ることができなかつた。雲がその上にとどまり、【主】の栄光が幕屋に満ちていたからである。」とあります。兄弟姉妹の皆さん、私たちが覚えなければいけないことは、私たちの神は余りにも聖いお方であって、罪ある私たちがこの方の前に立つことはできない、立って生きていることはできないということです。それ程聖いお方だということです。

モーセだけではありませんでした。祭司たちもそうでした。神殿が、また、幕屋が主の栄光で満ちたとき、だれもそこに近づくことができなかつた。それ程聖い、罪のかけらもないお方です。I 列王記 8 : 11 「祭司たちは、その雲にさえぎられ、そこに立って仕えることができなかつた。【主】の栄光が【主】の宮に満ちたからである。」、II 歴代誌 5 : 14にも同じように記されています。イザヤがこの主を見た時にこのように言っています。イザヤ書 6 : 5 「そこで、私は言った。「ああ。私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる。しかも万軍の【主】である王を、この目で見たのだから。」と。イザヤは「もう私は生きていられない。神を見た私は生きていられない。なぜなら、神は全く聖いお方であり、私は罪に汚れているから。」と言うのです。

私たちは自分に問い掛けてみなければいけません。このような恐れを私たちは神に対して持っていますか？どこかで私たちは「多少の罪なら神は赦してくださる。大丈夫！恵みの神だから…」と、私たちはどこかで持つべき神に対する恐れを失っていませんか？神は変わっておられません。今、私たちがこうして神の前に立つことが赦されているのは、私たちが何かをしたからではない、神の一方的な恵みによるのです。神が私たちを迎えてくださったから、私たちはその前に立つことができるのです。でも、私たちが忘れてはならないのは、この神に対するふさわしい聖い正しい恐れです。この聖い正しい神があなたや私のすべてのことを見ておられるのです。すべてのことをご存じであると、そのことを考えると恐れが湧いて来ませんか？この方は何一つ私たちに知らないことはないのです。どんなことを思い、そんなことを考え、どんなことを口にして来たか、どんなことを行なって来たか、すべてのことをです。それが神だと言うのです。このような神が私たちを受け入れてくださり、そして、素晴らしい祝福を与え続けてくださっているのです。だから、私たちはこの方を心から誉め称えるのです。「神さま、感謝します。ありがとうございます。」と。

4) 創造主なる神 5節

「まことに、国々の民の神々はみな、むなししい。しかし【主】は天をお造りになった。」、私たちが誉め称えるべき方、この神はすべてのものをお造りになった創造主なる神だと言うのです。ということは、創造主だということは、私たちは創造主に対して責任を負っているということです。この地上にあって「好きなように生きて良い」とは決して聖書は教えません。私たちみな、例外なしに、創造主なる神に対して責任があるのです。5節に「【主】は天をお造りになった。」とあります。この【主】は太字で書かれています。「ヤーウェー」、自存の神です。主権者なる神です。つまり、だれからの助けも必要としない、あなたの助けを必要としないお方です。この方はご自分でお決めになったことを、ご自分の力をもって成し遂げるお方です。私たちの知恵も助言も、いかなる助けも必要としない。そのような神だと言っているのです。ゆえに、この世に存在する神と名の付くものとは根本的に違うということ言うのです。

詩篇 115 篇で著者は私たちに、聖書が教えている創造主なる神と、この世の人々が崇拝する神々がいかに違うかということをお話しています。2-8 節「:2 なぜ、国々は言うのか。「彼らの神は、いったいどこにいるのか」と。:3 私たちの神は、天におられ、その望むところをことごとく行われる。:4 彼らの偶像は銀や金で、人の手のわざである。:5 口があっても語れず、目があっても見えない。:6 耳があっても聞こえず、鼻があってもかげない。:7 手があってもさわれず、足があっても歩けない。のどがあっても声をたてることもできない。:8 これを造る者も、これに信頼する者もみな、これと同じである。」。3 節に「私たちの神は、天におられ、その望むところをことごとく行われる。」とあります。なぜなら、この方は主権者だからです。この方はすべてのものをお造りになったから、ご自分考えに基づいてすべてのことを為す権利を持っておられる神であるからです。神であるがゆえに、あなたの心の叫びを聞くことができます。あなたが一人になってその寂しさの中で苦しさの中であなたが叫ぶその叫びを、この神は聞いておられるのです。だから、神なのです。人間が造ったものは、このみことばが言うように耳があっても聞くことはできません。一生懸命説明しなければいけません。説明しても理解することはありません。人間が造ったものだからです。神は造り物ではありません。神は私たちが造られたお方です。ですから、あなたの心の叫びを聞くだけでなく、あなたに正しい助言や励ましを与えることができますし、また、全能の御手をもってあなたを導くこともできます。そのように生きている神です。それが私たちの神だ、それが神と呼ぶにふさわしい唯一のお方であると言うのです。

かつて、私たちが神として手を合わせてきた存在と比べてみてください。どんなに美しくても人間が造ったものです。どんなに美しくても日々衰えていくものです。死を迎えるのです。それらは神ではない！神はいのちの源であり、いのちをお与えになった方であり、すべてをお造りになり、そして、すべてを治めておられるお方です。だからこそ、この方を誉め称え、そのようにこの詩篇の著者は私たちに教えます。

B. 主なる神を宣べ伝える 2b-6 節

二つ目の、私たちの神に対する応答は「主なる神を宣べ伝える」ということです。

1. 宣教 2b-3 節

2 節後半-3 節に「日から日へと、御救いの良い知らせを告げよ。:3 主の栄光を国々の中で語り告げよ。その奇しいわざを、すべての国々の民の中で。」とあります。ここに「告げよ」「語り告げよ」とあるのはすべて命令形です。しかも、強調された命令です。私たちは何を人々に告げるべきなのか？二つのことが記されています。

1) 主の栄光を

「主の栄光を国々の中で語り告げよ。」と言います。確かに、詩篇 19 : 1 には「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる。」と書かれています。つまり、自然界は一生懸命そのわざを為しているのです。自然界は創造主なる神のすばらしさ、その偉大さ、その美しさを明らかにしています。みことばは、それは自然界だけの務めではない、私たちの務めでもあると教えます。イザヤ 43 : 7 には「わたしの名で呼ばれるすべての者は、わたしの栄光のために、わたしがこれを創造し、これを形造り、これを造った。」とあります。みことばははっきりと教えています。あなたは神の栄光を現わすために造られたのです。そして、神の栄光に逆らって来た私たち、神の栄光に泥を塗って来た私たちが、その罪から救い出されて、今度はその神の栄光を現わすものとして生まれ変わり、その役割のために生かされていると言います。ですから、この救いに与った私たちは神のすばらしさを世に証するために、神から今日という日を与えられているのです。生きておられる神がどんなに偉大な方なのか、どんなにすばらしい方なのか、この方によって私たちの罪が赦されること、この方によって与えられる希望がどんなにすばらしいのか、そのことを私たちは日々の歩みを通して明らかにして行くのです。

2) 主のみわざを

「その奇しいわざを、すべての国々の民の中で。」と、確かに、イスラエルはその大切な務めのために選ばれました。主の成されたみわざを人々に明らかにするためにです。神の偉大さを人々に伝えるという大きな役割です。そして、その役割はイスラエルだけでなく、私たち一人ひとりに与えられています。神が私のために何をしてくださったのか？それを「証」と言います。私たちが証をするのは、私たちのすばらしさを話すものではありません。神がどんなにすばらしいことを私にしてくださったのかを人々に明らかにするのです。こうして私たちはこの地上にあって、この神のすばらしさを人々に明らかにするのです。

2. その理由 2b 節、4-6 節

なぜ、そのことが必要なのか？その理由について 2 節の後半から 4-6 節に記されています。

1) 御救いのゆえに

2b 節に「日から日へと、御救いの良い知らせを告げよ。」とあります。私たちは救われたのだから、そ

のすばらしい救いを人々に宣べ伝えるべきだと言います。もちろん、この「御救い」というのが捕囚からの救いなのか、敵からの救いなのか、さばきからの救いなのか、罪からの救いなのか、明確に記されていません。しかし、いかなるものであれ、救われた者たちは救われたことを明らかにしていくのです。私たちは神のあわれみによって罪の赦しを頂きました。罪から救い出された、永遠のさばきから救い出された者は、その救いを人々に明らかにしていくというその大きな務めを頂いています。

どうですか？皆さん、救いに与ってから、このイエス・キリストを伝えるということ、このすばらしい救い主の救いのみわざを語ることに励んでいますか？多くの皆さんが励んでいることでしょう。それなら、益々励んでください。天に上がるまで私たちはその働きを継続するのです。

かつて皆さんに紹介した一人の牧師のことを話しましょう。サイーダ・アバディニという名のイラン人です。現在、イランの刑務所に収容されています。彼は2000年にイスラムから救われました。イラン政府は確かにクリスチャンを認めてはいます。教会もあります。しかし、このようにイスラムから改宗した人に関しては、そのような公認の教会に属することを認めていません。それでイスラムから改宗したクリスチャンたちは自分たちで「家の教会」とか「地下教会」をいう集まりを作って、自分たちで礼拝を守り続けます。このアバディニは救いに与ってからそのリーダーとして100カ所に及ぶ家の教会を30の町で作り上げたと言われています。あのイランにあって、約2000人の人たちがその教会に集っていたと言います。皆さん、私たちはあのイランという国を見た時に、イスラムの国を見て、クリスチャンの数が少ないと思いますが、もしかすると、一番少ないのは私たちの国かもしれません。この日本が世界中で最もクリスチャンの数が少ないの国かもしれません。少なくとも、信仰を主から頂いたこの人物は、そのような迫害下の中においてキリストの福音を語り続けました。そして、多くの人たちがこの救いに与ったと言います。

神によって救われた私たちも、今一度、この大きな使命を神から頂いことを思い出さないといけません。私たちはそのために救われて、そのために生かされているからです。私たちはイエス・キリストの福音を語るために生きているのです。躊躇していませんか？怖れていませんか？このキリストの福音以外に人が救われるメッセージは神から与えられていないのです。イエス・キリストだけが救い主なのです。そのメッセージを語りなさいと、あなたを救ってくださった主があなたに命じておられるのです。アバディニはその命令に従って、あのイランという国において忠実に宣教を続けました。

2) 真の神ゆえに

私たちがこのように主を宣べ伝えていくのは、救われたからであり、二つ目の理由はこの方が真の神だからです。この方が真の神だから私たちは伝えるのです。偶像を伝えても意味がないのです。悲しいことに、そういう人々がこの世界には溢れています。真の神でない偽りの神々を神として伝えている人たち、しかし、みことばが明らかにしてくれたように、この方は天地をお造りになった創造主なる真の神です。私たちはこの方を伝えるのです。

このサイーダ・アバディニについてももう少し補足させてください。イランは2005年にマフムード・アフマディーネジャードが大統領に選ばれました。彼が選ばれて以降、特に「家の教会、地下教会」と呼ばれているクリスチャンたちを迫害する動きが加速しました。そこでこのサイーダ・アバディニはアメリカ国籍の奥さんとともにアメリカに渡ります。そして、彼は牧師となり、同時に、アメリカ国籍を取得します。彼はアメリカ国籍とイラン国籍の二重の国籍を持つようになります。2012年7月に、2009年から数えて9回目のイラン訪問をします。目的は自分の家族を訪問することと、もう一つはラシャットという町に孤児院を建設するためでした。しかし、その際、警察によって軟禁状態に陥り、後にエビン刑務所に送られて行きます。2013年1月の中旬に裁判が行なわれ、その結果、彼には8年の実刑が下りました。国連でもこのことが取り上げられ、様々なニュースがこの記事を取り上げました。イラン政府にプレッシャーが加わりました。すると、イラン政府は彼を重刑者を収容する最悪の刑務所に移すのです。

なぜ、彼が捕えられたのか？なぜ、軟禁状態になったのか？その理由は、イラン政府は彼が人々にキリストを伝えて、そして、多くの人々をイスラムから改宗させようとしているからだということです。まさに、信仰ゆえに彼は捕えられたのです。多くの人たちが彼にこんなアドバイスを与えました。「もし、あなたがキリストを捨ててイスラムに戻ればあなたは釈放される。あなたは家族のもとに帰れる、アメリカで待っている奥さんと二人の子どものもとに帰れる。」と。もちろん、彼はそれを受け入れません。そして、驚くべきことは、その大変な刑務所の中で、もうすでに30人以上の人たちがイエス・キリストを信じているのです。彼の妻がある大学で講演をしました。もちろん、愛する者と今ともに時間を過ごせないことは自分にとっても子どもたちにとっても悲しいことだと言いつつも、彼女は「それでも私たちは神さまを信頼し神さまの最善が為されることを信じている。このことが起こってから多くの無神論者やイスラム教徒が私のところにやって来て、『なぜあなたたちはこのような状況にあってそ

んな平安や喜びを持っているのか?』と尋ねます。この機会を通して多くの人たちがイエス・キリストを信じました。」と証しています。

皆さん、私たちの神は生きて働いている真の神です。人間が勝手に造り出した存在ではありません。この方によって私たちは造られたのです。この方はすべての主権者です。人間的に見て「どうして?」と思えることがあっても、神はそこで神のみわざを為しておられるのです。神に喜んで使われたいと願っている人たちを通して…。彼がいつ釈放されるのかは定かではありません。アメリカの大統領も働き始めていると言います。しかし、いつ釈放されるのかは明らかになっていません。ひょっとしたら8年後かもしれない。でも、この牧師もそうだし、この家族もそうです。彼らが望んでいることは主のすばらしさが明らかにされることです。それができたらそれで良いと。そのために生きていますから。私たちもその通りです。

皆さん、私たちはだれかが作った宗教を広めようとしているわけではありません。私たちは私たちが造られた生きておられる真の神を人々に伝えようとしているのです。宗教をだれかに宣伝して、その宗教に引き込もうとしているわけではありません。すべてをお造りになった創造主なる真の神がおられることを人々に明らかにして、その神に立ち返るようと神のメッセージを伝える役割を主から頂いた者たちです。その働きを皆さん熱心に為していますか?救われた者であるゆえに、このすばらしい救いを人々に伝えておられますか?この偉大な創造主なる真の神を人々に伝えていきますか?神に対してふさわしい応答、正しい応答はこの神を人々に伝えることです。

C. 主なる神を礼拝すること 7-13節

1. 礼拝への招き

7-9節「:7 国々の民の諸族よ。【主】にささげよ。栄光と力を【主】にささげよ。:8 御名の栄光を【主】にささげよ。ささげ物を携えて、主の大庭に入れ。:9 聖なる飾り物を着けて、【主】にひれ伏せ。全地よ。主の御前に、おののけ。」「国々の民の諸族よ。」と異邦人を含むすべての者たちに神を礼拝するようにと、彼らに対する招きが与えられています。そして、三つの正しい態度が記されています。

◎正しい礼拝の態度

1) ささげ物をもって 8節

8節に「ささげ物を携えて、主の大庭に入れ。」とあります。私たちが主を崇める時、礼拝するときに必要なのは、心からすべてのものをささげてこの方を崇めることです。「ささげよ」ということばも7、8節で3回繰り返されています。すべて命令形です。私たちはローマ書12:1で「自分自身をささげなさい」という神の命令を知っています。「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」。神が望んでおられることはあなた自身をささげることです。そして、神から託されている私たちのものを主にささげることです。この世の人々も偽りの神々に喜んで犠牲を払っています。私たちは真の神に仕える者として、喜んですべてのものをささげながら主を崇め続けていくのです。

2) 聖さをもって 9節

9節の初めに「聖なる飾り物を着けて、【主】にひれ伏せ。」とあります。聖さをもって主の前に立たないといけな、主を崇めないといけなということ。私たちのうちから罪を除くことです。どんな罪も神はお喜びになりません。

3) 恐れをもって 9b節

「全地よ。主の御前に、おののけ。」、恐れをもって主を礼拝しなさいと言います。すでに見て来たように、この方は神だからです。預言者マラキがこのように言っています。マラキ書1:6「子は父を敬い、しもべはその主人を敬う。もし、わたしが父であるなら、どこに、わたしへの尊敬があるのか。もし、わたしが主人であるなら、どこに、わたしへの恐れがあるのか。——万軍の【主】は、あなたがたに仰せられる——わたしの名をさげすむ祭司たち。あなたがたは言う、『どのようにして、私たちがあなたの名をさげすみましたか』と。神に対してふさわしい心の態度をもって主を崇めているかどうかです。

私たちが神を崇めるに当たって三つの正しい態度は、ささげ物をもって主を崇めること、あなたが持っているもの、あなたの人生、あなたのいのちもあなたのすべてのものは主から託されているものだから、喜んで主にささげて主のために用いて頂きなさいということでした。そして、主の前に罪を聖められて立ちなさい。また、正しい恐れをもって主を崇めなさいと記されています。

2. 心から主を崇めるその理由 10-13節

1) 王であるから 10節

10節の初めに「国々の中で言え。『【主】は王である。』とあります。この方が王であるということは、私たちがそのしもべです。だから、この方を崇めるのです。この方が喜ばれることを為していくのです。

2) さばき主だから 10b—13節

(1) 公正なさばき

10節の後半に「…主は公正をもって国々の民をさばく。」とあります。このさばき主は公正なさばきを下されます。神の前に立つ時に、神が下されるさばきは正しいさばきです。なぜなら、神はすべてのことをご存じだからです。クリスチャンの皆さん、これがわたしたちの希望です。人々は誤解するかもしれない、皆さんは人々に誤解されているかもしれませんが、でも、神はそうではない、神はちゃんとあなたのことをご存じです。公正な正しい審判が成されます。あなたが主のためにしたすべてのことは決して無駄ではなかったと分かる日が来ます。主に忠実に従って来て良かった！と、そのように心から言える日がやって来ます。主の前に立つときに、主はすべてのことを覚えておられて、それにふさわしい公正なさばきを下してくださるのです。だから、人々が認めてくれなくても、人々から誉められなくても、主のためにしっかりと歩み続けることです。主が誉めてくださったらそれでいいのです。

(2) 待望のさばき 11—12節

「:11 天は喜び、地は、こおどろし、海とそれに満ちているものは鳴りとどろけ。:12 野とそこにあるものはみな、喜び勇め。そのとき、森の木々もみな、【主】の御前で、喜び歌おう。」と。自然界がそののろいから解放されるのです。ローマ8:19—21に記されています。「:19 被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現れを待ち望んでいるのです。:20 それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。:21 被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。」、人間の罪ゆえにすべてのものはのろわれてしまったけれど、被造物はその束縛から解放される時を待っている、その日がやって来ると言います。さばき主が帰って来られる時に、すべての被造物がそののろいから解放されると。

(3) 確実なさばき 13節

13節に確実なさばきであると記されています。「確かに、主は来られる。確かに、地をさばくために来られる。主は、義をもって世界をさばき、その真実をもって国々の民をさばかれる。」と。この詩篇の著者は単なる希望を話したのではありません。確実に起こることを記しています。さばきの日が来るのです。同じ詩篇98:9にも「確かに、主は地をさばくために来られる。主は義をもって世界をさばき、公正をもって国々の民を、さばかれる。」と書かれている通りです。クリスチャンにとってはそれは喜びの日となるはずですが、もし、あなたがそのさばきの日の備えをしながら今日を生活しているなら…。しかし、もしそうでなかったら、その人にとってこれは恐ろしい日です。なぜなら、恵みによって救われていながら大切な日々を、大切な時間を無駄に過ごして来たからです。主に仕えるという大切な機会をみすみす逃してしまったのですから…。もし、それに該当する人がいるなら、今日その罪を悔い改めて、今日から主に忠実に従っていかれることです。

そして、主イエスの救いを拒んだ人たちにとっては最も恐ろしい日です。なぜなら、その時に、主イエスこそが救い主であったことを、この方が真の神であったことを知らされるからです。そして同時に、警告されていた永遠のさばき、地獄が現実のものであることに気付くのです。自分自身がその永遠の燃える火の中で実際に苦しみを受けているからです。

パウロはピリピ人への手紙の中で、「:10 それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものすべてが、ひざをかがめ、:11 すべての口が、「イエス・キリストは主である」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。」(2:10—11)と言っています。これは世の中のすべてのものがイエス・キリストを主として崇め礼拝するということです。そのような日がやって来るのです。すべてのものがイエスの前にひざまづくのです。もちろん、贖われた私たちも、天使たちも、そして、それだけでないのです。救いを拒んだ者も、罪を犯した天使たちも、すべてのものがこの現実に気付くのです。恐らく、拒んだ者たちは私たちとは違って心からこの方を誉め称えることはないでしょう。彼らは後悔と永遠の苦しみをもち、このイエスが真の救い主であったことを、この方が真の神であったことを認めるのです。その日がやって来る、すべての被造物が創造主なる神の前にひざまづくのです。

信仰者の皆さん、その日が来るのです。だから、私たちはそれを知っているゆえに、その日のために備えをすることです。しっかりと主のために働き続けることです。「これだけ主に仕えたからもう十分です」などと言える人はいますか？果たして、それは神に対する正しい応答でしょうか？まだまだしなければならぬことは残っています。まだまだこの福音を知らない人たちが私たちの周りにいます。語り続けて行くことです。この方を誉め称え続けて行くことです。そして、この方を礼拝しながら、この方の証を為し続けて行くことです。

どうぞ、この新しい一年、主にふさわしい歩みをもって歩み続けてください。どのように生きていくのか、それは私たち一人ひとりが選択しなければいけません。主に喜ばれることをもって私たちの感謝を表わし続けて行きましょう。

《考えましょう》

1. 私たちは日々、主からすばらしい恵みを頂いています。それでいて、どうして、日々主に「新しい歌」を歌わないのでしょうか。また、その賛美の熱意が時間とともに冷めてしまうのはどうしてでしょう？
2. 主の「栄光」と「御救い」を告げ知らせることがどうして大切なのか、その理由を書いてください。
3. 主を恐れない原因は何だと思われますか？
4. どうすれば、主を正しく恐れることができるのかをお書きください。